

プロジェクトタイトル	大学空白地帯におけるラーニング・コミュニティ形成プロジェクト
プロジェクト代表者	赤穂雄磨（CGS 特任准教授）

## 1. プロジェクトの目的・概要

本プロジェクトは、ユニバーサル・ユニバーシティ構想（以下 UU 構想）に賛同した複数自治体（表 2 参照）の関係者（高校教員、社会教育士、行政職員、地域おこし協力隊員、地域の事業者など）が毎月オンライン&オンサイトで集い、大学空白地帯における高等教育のありかたを探求する研究会を組成し、表 1 の狙いを達成することを目的とする。なおプロジェクトの成果物として、具体的な地域課題解決のための「シラバス」を共創する。これは 2026 年度の夜間主の新規科目として組成し（表 3）、人財育成をもって参加自治体に還元する。

## 2. 具体的な取組内容

一方的な調査ではなく学び合い・探求の連鎖の中で目的の達成に挑む「研究会方式」をとり、本学と包括連携協定を締結している自治体の成員に参加を促した。参加の案内は、別添フライヤーを当該自治体内で配布いただくと同時にメールベースで実施した。講演者や参加者数（申請者除く）は表 2 のとおりで、延べ人数 140 名（現地参加 75 名、オンライン参加 65 名）にご参加いただいた（実人数ベースだと 83 名であった）。研究会は別添フライヤー裏面のとおりに夜間（18-21 時）に実施され、申請者が各自治体の会場に赴き、そこをメイン会場にハイブリッド形式で実施した。なお参加者は第 1 項で想定した通りの属性であった。研究会は各回 2~3 時間で構成され、第 2~6 回は各自治体の取り組みについての講演（トピックは表 2 に記載）による意識づけの後、当該トピックの意見交換・質疑応答の後食事休憩をはさみ、シラバス組成に向けたディスカッションを実施した。

## 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

### 3-1. 地域への貢献

研究会の結果として、表 3 のとおり、シラバス組成に向けた知見を収集することができた。これをふまえて地方部（とりわけ大学空白地帯に位置する地域）を学習フィールドとする PBL 型授業を組成するにあたっては、以下三点に留意した。

第一に、学内カリキュラム・ポリシーとの整合性である。ただし、これは現行のカリキュラム・ポリシーを前提とするものではない。昼間部の単なる延長としての夜間制大学は、その役割を終えつつある。今後は、多世代による共創を促す異質型実践共同体の実践の場としての特性を踏まえた、夜間制大学固有のカリキュラム・ポリシーが求められる。そこで本プロジェクトでは、今後のカリキュラム・ポリシーとして次の二点を仮設定し、これに資する教育内容を前提とした。すなわち、①最新の社会科学的知見を用いて地域課題の解決に取り組み、地域の活性化を担う人材の育成、②地域に内在する潜在的資源を発掘し、国内外の他地域と結びつけたビジネスを創出できる人材の育成である。

第二に、国内における先行的な成功事例のベンチマークである。例えば、さとのば大学に代表されるように、いわゆる一条校ではないものの、学びの場を地方部に設定し、地域と密接に連動した教育実践を行

っている事例が存在する。高等教育として、学習目標を明確に設定せずプロセスのみを重視するラーニングジャーニー的設計は回避すべきであるが、こうした教育機関が示す地方部への貢献姿勢や実践に根ざしたカリキュラム設計は、本研究においても重要な参照枠となる。

第三に、授業形態、対象学年および学生像の設定である。非認知能力の伸長を考慮すると、成人前段階にある1・2年次学生を主たる対象とすることが望ましい。また、多様な世代や背景をもつ学習者が相互に学び合う異質型実践共同体の形成を企図し、地方部のサテライト教室で学ぶ勤労学生と、都市部出身の夜間部学生との協働を重視し、夜間部全体を対象とした。科目構成は、前期・後期制の下、1科目15コマ（2単位）とし、1学年あたり2科目、2学年で計4科目のシラバス設計を想定した。授業形態はオンラインと対面を組み合わせたハイブリッド方式とし、形式上は対面授業として位置づけるため、全授業回数の半数以上を本学メインキャンパスまたは現地でのPBLとして実施することを前提とした。

以上三点に留意して組成した四科目が表4である。本年度の社会人入試枠において、UU構想に基づく、プロジェクト参加自治体からの合格者（表1に記載した進学支援型PF利用者）はいないものの、地域共創実践Ⅰおよび地域共創実践Ⅱは試験的に来年度に実装し、地域に還元する。

なお本プロジェクトは、授業実装による地域活性化への貢献のみならず、企画段階から高大接続に課題意識をもつ地域の教育関係者間に学びのコミュニティを醸成するという、二重の意義を有する試みである（表1）。各地域における学びのコミュニティの醸成は、本研究会の終了後も継続的に実践されることを想定している。具体的には、本シラバスの実施段階において、研究会参加者が中間管理的機能を担う形でそれは実践される。これは、表2の6-6および6-7に示されるように、PBLを地域で実施する際、受け入れ先となる地域と大学との間に立ち、相互の認識の齟齬や負担感を軽減する調整役として継続的に学びに関与してもらうことを意味する。

加えて、夜間主コースへの進学者数については次年度以降に定量的な結果の計測が可能であると考えられ、継続的にモニタリングしていく。

### 3-2. 学術的貢献

本プロジェクトは、夜間制大学を教育の枠組みではなく、大学空白地帯の活性化に資する地域政策の枠組みで捉え直したアクションリサーチに該当することから、日本地域政策学会への「研究ノート」または「政策課題研究」として投稿する（現在、投稿済み査読中）。

### 3-3. UU構想への貢献と展望

地域で期待される人材は、ビジネス知識よりも共感性や自己効力感といった非認知能力が高く、抽象化や物語的思考を通じて協働を促し、グローバルな視点から地域の価値を再認識できる者であることが明らかとなった（表3の赤字部分より）。しかし、このような地域ニーズはシラバスレベルでは反映されるものの、教学ポリシーや入試制度においては十分に考慮されていないという課題がある。そこで、市民的資質やグローバルな視点の醸成を目的として必修化された高校の科目である「公共」および「地理総合」に着目する。これらを好み高い学習成果を示す生徒は、地域が重視する市民性や公益性、さらには「よそ者効果」を生み出す非認知能力を併せ持つ可能性があるとの仮説が立てられるためである。今後の研究では高校生を対象に、既存の心理尺度を用いて非認知能力を測定し、「公共」「地理総合」に対する学習嗜好および成績との関連を統計的に検証する。これにより、地域が育成を期待する人材像を起点として、夜間主コースの教学ポリシーおよび社会人枠の入試制度を再構築するための実証的根拠を提供することを目指す。

別表

(表1) 本プロジェクトの狙い

主な参加者→	高校教員	社会教育士	地域おこし協力隊員	地域の事業者
共通の狙い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学空白地帯における教育課題の共有と協働による人的ネットワークの形成</li> <li>・高度教育人材（将来的に UU 構想のサテライトにおける非常勤講師や勤労学生のメンターとなりうる人材）の育成</li> <li>・共通の課題解決を目指す授業（PBL）の共創と当該授業参加による人材育成</li> </ul>			
個別の狙い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進学支援型 PF の利用希望者への啓蒙・支援</li> <li>・総合的な探求の時間の実施能力の形成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リカレント・教養教育型 PF 利用希望者への啓蒙・支援</li> <li>・当人の夜間主への進学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自治体間の交流促進による移住者の悩みの共有、定住人口化</li> <li>・当人の夜間主への進学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進学支援型 PF の利用希望者への啓蒙・支援</li> <li>・地域課題解決への CSR 活動の意識醸成</li> </ul>

(表2) スケジュールと参加者

回	開催日時	ホスト自治体 (現地会場)	前半部講演者 (所属)	主たる講演内容	参加人数	
					現地	オンライン
1	2025年 7月18日	小樽市 (小樽商科大学)	赤穂雄磨 氏 (小樽商科大学特任准教授)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜間制大学の背景</li> <li>・本研究会のルール</li> <li>・シラバス作成方法解説</li> </ul>	5	6
2	2025年 8月26日	音更町 (昭和商学校 Palette)	横井大祐 氏 (音更町 まちづくり推進係長)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音更町の起業家育成の背景</li> <li>・起業家育成施策</li> <li>・これからの教育の展望</li> </ul>	6	16
3	2025年 9月10日	上川町 (上川高校)	中津夏子 氏 (インフィニティ国際学院 チューター)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上川町における同学院の特徴</li> <li>・上川町の特徴と事例</li> <li>・同学院のPBL設計のポイント</li> </ul>	7	12
4	2025年 10月30日	湧別町 (文化センターTOM)	綾部雅一 氏 (湧別町 教育総務課指導室長)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・湧別町の義務教育学校化の流れ</li> <li>・特徴的な互学互習の教育設計</li> <li>・町の進学支援施策</li> </ul>	16	9
5	2025年 11月26日	ニセコ町 (ニセコ高校)	中谷知記 氏 (北海道ニセコ高校教諭)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同高校の国際教育</li> <li>・シビックプライドを醸成する教育の重要性</li> <li>・観光教育を通じた起業家育成</li> </ul>	10	16
6	2025年 12月19日	中標津町 (中標津町役場)	本間玲子 氏 (なかしべつ町民活動ネットワーク 代表)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中標津町の町民ファシリテーター制度</li> <li>・計画策定への町民の巻き込み</li> <li>・中標津での起業の実践</li> </ul>	19	4
7	2026年 1月28日	江差町 (コミュニティ ラザえさし)	木村侑 氏 (コミュニティプラザえさしプランコーディネーター)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やる気とやれる気の差異</li> <li>・江差町でのバルシューレ・マルチスポーツの実践</li> <li>・自治体の境界線を越えた学びへの展望</li> </ul>	12	2

(表3) 研究会の発言要約・抜粋

回	トピック分類	発言要約・抜粋
1	科目の内容に関して	1-1. 地域の課題を洗い出す作業だけでも科目になるのではない。 1-2. 職業に対する選択肢、世界観を広げる内容が好ましい。 1-3. 地方部には産業がないため、業を起こすためのビジネスモデル(稼ぎ方)を学ばせたい。
	小樽 授業の進め方に関して	1-4. 自分で学ぶというよりも、何かを実践しようとしている人と共に行動してアイデア交換をする学び方はどうか。 1-5. 地方部の現実を地元の高校生にプレゼンさせ、それを夜間主の学生が学ぶのは双方にとって意義があろう。 1-6. 大人になってからも学び続ける人は、すでにコミュニティを形成している。夜間主学生とそうしたコミュニティとの学び合いが促進される設計が良からう。
	高大接続に関して	1-7. 先輩などのロールモデルが示されないと、肉体的・精神的にハードな勤労学生を前提にした夜間主への進学は浸透しないのではないか。
2	音更 科目の内容に関して	2-1. 世代間を超えた交流を支えるのは地域の「思い入れ」なので、歴史・文化的背景を可視化することは面白い授業になるのではない。 2-2. 効用の最大化ではなく、費用の最小化が指標となることが、地方部の公共事業では多い点を踏まえたい。 2-3. 経済性に限らず、リソース(他者の力)の借り方を学べると良い。 2-4. 計画を左脳的に数値化するよりも、右脳的に得心してもらって言語化能力の涵養が地方部では重要だろう。 2-5. ソーシャルビジネスを支援するにあたり、支援者はマネタイズ能力よりも公益性(および人柄)を見るので、公益性とは何かを、突き詰める授業が良からう
	科目の内容に関して	3-1. 自身がマジョリティー・メインストリームにいる、ある種の特権をもっているという自覚(省察できる力)をもったリーダーの育成、すなわち市民性の醸成は、都市部から地域に入り込みビジネスを営む際に必要になる。 3-2. 直接的なビジネスにつながるだけでなく、地域でPBLを行う以上、経済資本以外の文化資本や社会資本の積み上げにつながるプログラムがあっても良い。
3	上川 授業の進め方に関して	3-3. 内容をあらかじめ決めず、学生のエージェンシー(主体性)を刺激する意味で、あえて主導権を学生に渡してしまうのも良いと思う。特に学生の共感性の伸長は、本質的副産物(伸ばすことを目標として設定しても伸びるようなものではない)であるというコンセンサスを取ることで、目的や目標を定めない授業も可能かもしれない。 3-4. 偶発的計画理論でいうところの冒険心、直観力は野外教育で磨かれるようなので、自然に向き合う場の提供には意味があるだろう。そのうえで「何して良いかわからない体験」も必要ではないか。 3-5. エージェンシーをもっていないアントレプレナーはいないので、その伸長を評価できるようにしたい。
	高大接続に関して	3-6. 社会彫刻の概念においてはモブキャラではいられない。日本の若者の自己効力感が低いのは、社会の一員であるという感覚を持ってない社会(環境)に原因があるのかもしれない。よって地方部の高校生にせよ夜間主の学生にせよ少数であることを活かし、スポットライトのあたる設計が肝要。
4	湧別 科目の内容に関して	4-1. 基礎から応用への積み上げというセオリーに反し、応用から実施することでやる気をだす子供が一定数いる。単なる知識のインプットには興味を示さない一方、深く考えるテーマには集中力を発揮し、すばらしい発想をみせるケースがあり、応用科目から教授するのも良からう。 4-2. 実際に新規事業を実施するにあたり、コーゼーション的な発想からスタートしたことはない。むしろ地域のためになりそうだから、という理由ではじめトライアンドエラーしながら正解を探していくエフェクチュエーション的な発想に基づく。 4-3. 人脈などのネットワークなど無形の資産をその過程で手に入れていくところにビジネスの成功のタネがある。答えのある問題を解いていくという既存の発想ではなく、答えのない、ビジネスのもつ予測不可能なリスクに対応できる人材の育成が好ましい。
	授業の進め方に関して	4-4. 教え方を限定しないことは、教員のプライドを守りつつ、教員に学生の学びに集中してもらうのに重要な視点である。 4-5. 何かを「わからないといけなし」という強迫観念を学生に捨ててもらおうこと、分かなければ気軽に質問できる場を用意し、学力における上下関係の発生を緩和することを念頭に授業をするのが良い。 4-6. フェイス(学生の学びのモチベーションに影響を与えるプライド、メンツ)を棄損してしまった際のアフターケアや今後の予防や回復など共通のルールづくりそのものに時間をかけるのも重要な視点だろう。 4-7. 何を学ぶかではなく、他者と共に何かを学ぶ際に発生する、他者から得られる「気づき」が重要である。よって大学の授業の中にも気づきを生む多様なステークホルダーが共同学習者として参加できることがひとつの設計の目安になるだろう。
5	ニセコ 高大接続に関して	4-8. これからの夜間主コース(地域でのアントレプレナー)にふさわしい人材を考えれば、入試における評価項目も非認知能力などを重視するなら変化が必要であろう。
	科目の内容に関して	5-1. 居住先の地域の一員として貢献できる人材となるための第一歩はシビックプライドの醸成、すなわち社会の一員として活動することで自身と社会のウェルビーイングを見出すための意識づけであろう。 5-2. 漠然と何か起業するよりもあらかじめ地域側からの課題や何らかの制限を与えたほうが、成果はでるだろう。 5-3. 先にグローバル教育で外の世界を知ることが、自分の地域の良いところを見直すローカル意識の醸成につながる。 5-4. 「自分のものさし」をもつことで自分にとってのウェルビーイングを言語化できる力がまず欲しい。そうでないと都会が上で地方が下という誰かに押し付けられた価値観に拘泥してしまうだろう。自分の軸を見つけるにはマイノリティになる経験が良いかもしれない。
6	中標津 授業の進め方に関して	5-5. ウェルビーイングの自覚には、ケイパビリティ(潜在能力を発揮できる)の達成を表現できる「場」づくりが重要であろう。 5-6. 日本語を学習中の海外学生を参加させ、先方が熱心に日本語を話そうとする姿から、学習姿勢やバイタリティーを刺激するやり方は有効か。 5-7. 失敗は成功以上に本質的である。失敗を省察し言語化させるなど失敗を成功以上に評価する軸が有効であろう。失敗に恐れずに向かっていく動機づけが鍵になる。
	科目の内容に関して	6-1. 人脈づくりが重要であり、人たらしを育成するのがポイント。すでに人脈が出来上がっているコミュニティに新たに入っていくのは勇気がいるが、ひとたび協働すればその時の達成感から、以降の行動を変えるだろう。 6-2. 実現したい未来の世界観をまず共有することが重要である。 6-3. 地域活性化の実際の泥臭い現実と活躍のステージとしての前向きなイメージの乖離の解消は、逆説的に地方部であっても会社に勤めることがコスパの良い選択肢と映り、移住、ひいては地域活性化につながるかもしれない。 6-4. 自分化するプロセスは、主語を大きくしていくプロセスである。「わたし」の場合は、誰かが自分に何かをしてくれる前提であり、主語が組織、地域と大きくなった人が自主的に活動に移せるのだろう。役割付与やイベントを通じて半強制的に主語を大きくできないだろうか。 6-5. サブテーマとして学期ではなく1年間を通じて、生徒間でどのように信頼、相互理解を深められたかなどを自己分析するような時間を設けたい。
7	江差 高大接続に関して	6-6. 地域に連れ出したい大学側と受け入れ地域側間のニーズ・シーズのすりあわせ、コーディネートをする中間団体を挟むと不要なハレーションを抑えられるケースがある。 6-7. 座学で学んでから地域で実践ではなく、いきなり地域に入ってもがけるチャレンジができることが大切であり、それでいて大失敗に至らないサポートができるのが受け入れ地域としての条件となろう。
	科目の内容に関して	7-1. 地域において他者と協調したり、説得したりするにはストーリーを語れることが重要である。ビジョンの共有においてもストーリーで語れる力は必要である。 7-2. 価値観(例えば地方部は都会部に劣らず素晴らしい場所という意識など)を創ることは、「選ぶ力」を身に着けさせることに同義である。選べる環境を創ることの両輪で成り立つ。選ぶ力に必要な意思決定のための知識は学問の中で得ることになる。
7	江差 授業の進め方に関して	7-3. 教えるというよりも身近な人が挑戦したり、実践したりしている姿を見せることが、当人の自己効力感を高めるのではない。一方でそうしたモデルになる人は地域内では、浮いていることもあるので、地域内の変わり者を評価する姿勢が地域には必要だろう。 7-4. 学校教育に偏重すると教科に目がいつてしまう。社会教育の視点を獲得することが教員に求められよう。 7-5. できるから楽しい、その楽しいを追求する中で自己効力感が身につくのだと思うが、授業の場合はできないことを無視できず「できなきゃいけない」という意識が生まれる。これが学習へのモチベーションを下けているのではないか。 7-6. 非認知能力の伸長はその場では成果はわからないうえ、当人も省察できない。しかし、いつかどこかで出会う刺激に対し、反応できる身体性を身に着ける準備段階なので基礎学力同様、早くに開発しておかないとならないものである。

(表4) シラバス案

これからの夜間主コースで育成したい人材は **地域でアントレプレナー**（社会科学の知見で地域活性化・地域と他地域を往還するビジネスの展開ができる人材）

2026年度 (R8) 実装

対象学年・実施期間	1学年・前期	1学年・後期	2学年・前期	2学年・後期
科目名	地域共創実践Ⅰ (フィールドワーク入門)	地域共創実践Ⅱ (社会起業家論)	地域共創実践Ⅲ (事業創造論)	地域共創実践Ⅳ (地域協働論)
単位と時間	2単位 (90分×15コマ分)	2単位 (90分×15コマ分)	2単位 (90分×15コマ分)	2単位 (90分×15コマ分)
シラバスの流れ (4科目共通)	事前学習 (小樽で対面) →事前学習 (オンライン) → <b>現地実践 (U構想自治体で対面)</b> →事後学習 (小樽で対面またはオンライン) ※現地実践以外は原則夜間 (17:45分以降) に実施			
身につけたいチカラ (本質的副産物)	自己の理解 (私の内側から)	未来の構想 (私の外側へ)	価値の編集 (地域の外側から)	協働の実践 (地域の内側へ)
評価方法 (4科目共通)	自己調整学習に基づく評価を導入 (成功、失敗問わずそのプロセスを省察し次につなげる姿勢を評価)			
変容するもの	行動	価値	知識	共同体
目的	地域社会、とりわけ不確実性の高い自然地域の中でのフィールドワークを通して、社会人基礎力 (12の能力要素) を体験的に磨く。特に仲間との協働に基づく「課題発見・解決」「チームワーク」「主体性」を重視し、将来の起業やマネジメントの素地を身に着ける。	本授業では、人間科学を基盤に、合理性ではなく正当性を重視する視点を養い、自身の描く未来像と地域社会の公益性を重ねるための理論を学習する。そして地域課題に挑み、社会起業家精神を体現している人材を通じて、ビジネスパーソンに必須の市民性を養う。	地域社会をフィールドとして、潜在的な課題の発見 (または顕在化している課題への着目) を行い、それらを解決・解消するための地域資源の活用方法や編集力を、マーケティング理論に基づいて育成する。そのうえで、実現性と収益性を備えた事業計画を策定・プレゼンする力を身につける。	実際に地域で事業に取り組むにあたり、事業計画を抽象化・ストーリー化するための理論的妥当性を学び、その技法を身につける。また、ファシリテーターやコーディネーターに求められるスキルセットを学び、関係調整や合意形成に至るプロセスを体験し、ガバナンスの重要性を理解する。
目標	・地域社会における課題発見・解決の技法としてフィールドワークができる。 ・社会人基礎力12要素を客観的に理解し、自分の強み・弱みを把握できる。 ・チームで協働する経験を通じて社会情動学習の5領域 (自己認識・自己管理・社会的認識・関係性・意思決定) の重要性を認識し、かつ実践できる。	・人間科学の基本的な視点 (本質観取) を理解できる。 ・社会科学のモダニズム、ポストモダンからノンモダンへの変遷を理解し、主観の重要性を理解できる。 ・個の情熱から公のミッションへの接続を市民起業家から学び、プロセスを言語化できる。	・地域に潜む課題を多角的に把握し、分析できる。 ・既存および潜在的な資源を見極め、課題解決に活かすことができる。 ・マーケティングのフレームワークを使用することができる。 ・融資・投資・補助金を受けることのできる、社会性、実現性、収益性を考慮した事業計画を策定できる。	・多様な人々や組織と信頼関係のもと、「対して」ではなく「共に」思考することができる ・異なる立場の意見を調整し、合意形成を図る弁証法的対話を誘発できる。 ・仲間や地域の成長を支え、その変化を共有・祝福するステewardシップを発揮できる。
学術的キーワード	エスノグラフィー (文化人類学)、巡回、動態地誌学 (地理学)、アカデミックリテラシー (論理学) etc.,	本質観取 (現象学)、アクターネットワーク理論 (科学社会学)、社会的学習理論 (教育学) etc.,	エフェクチュエーション・コーゼーション (マーケティング)、資源論 (地域経済学)、管理会計 (会計学) etc.,	センスメイキング理論 (経営学)、拡張的学習理論 (教育学)、協働ガバナンス論 (公共経営学) etc.,

⇒グローバルな学習・教育は3年次以降のゼミで、海外向け地域商社の運営をもって実践

# 学びがひとを変える。 ひとがまちを育てる。

問題意識やアイデアを共有し、  
地域課題解決・解消を目指す、  
夜間制大学の授業を共創するための研究会が発足

## 期間

2025 Jul. ~ 2026 Jan. 毎月1回  
特別講演・グループワーク・ディスカッションで構成

## 対象

教育・人材育成を軸にしたまちづくりに関心のある方  
行政職員・高校・教育委員会・企業の社員・商工会関係者・地域おこし協力隊・社会教育士など

## 会場

道内各地の会場(※)とオンライン併用のハイブリッドセミナー  
※詳細は裏面参照

## 参加料

会場参加・オンライン参加いずれも無料  
お気軽にご参加いただけます

## 定員

なし(オンライン参加の場合)  
会場参加の場合は先着10名前後を予定



<https://forms.gle/kCQbe4xye8kjDmNQ8>

参加申込先

## 夜間制大学活用研究会 2025

申込期限 毎月の開催日(裏面記載)の3日前まで

※オンライン参加の場合のみ1日前まで

主催/小樽商科大学 グローカル戦略推進センター



### 研究会の主旨



【座長】

国立大学法人 北海道国立大学機構  
小樽商科大学 グローカル戦略推進センター  
赤穂 雄磨 特任准教授

### —地域課題解決に向けた授業を共創する—

夜間制大学を、知識基盤社会を支える「いつでも高等教育機関にアクセスできる拠点」として捉えることは、少子高齢化による地域の衰退に直面する現在、非常に重要です。実際、高等教育機関が地域の社会教育の拠点として機能別に分化する可能性は、2000年代から指摘されてきました。しかし、夜間制大学に関しては教育史や社会学では研究されてきたものの、地域政策の観点、特に地域コミュニティへの貢献については十分に検討されてきませんでした。

そこで本研究では、「ユニバーサル・ユニバーシティ構想(詳細は下部QRコード参照)」に賛同する道内自治体の社会教育に関心のある方々とともに、来年度の夜間制大学の新規科目を共に設計し、人材育成を通じて地域コミュニティへの貢献を目指します。

### 研究会のスケジュール

**研究会へのご参加は、表面のQRコードよりお申し込みください。ご都合のよい回のみのご参加でも差し支えありません。**

お申し込み後に予定の変更がございましたら、下部記載の問い合わせ先へメールでご連絡をお願い申し上げます。

日程	会場(すべてオンライン併用)	登壇予定者
7月18日(金)	小樽商科大学 コラボルーム	赤穂雄磨 小樽商科大学 特任准教授
8月26日(火)	音更町 小樽商科大学サテライト	横井大祐さん 音更町 まちづくり推進係長
9月10日(水)	上川高校 小樽商科大学サテライト	中津夏子さん インフィニティ国際学院 チューター
10月30日(木)	湧別町 文化センターTOM	綾部雅一さん 湧別町 教育総務課指導室長
11月26日(水)	ニセコ高校 小樽商科大学サテライト	中谷知記さん 北海道ニセコ高校 教諭
12月19日(金)	中標津町役場 301号会議室	本間玲子さん なかしべつ町民活動ネットワーク 代表
1月28日(水)	江差町 コミュニティプラザえさし	木村侑さん コミュニティプラザえさし プランコーディネーター
2月	開催なし(大学内新規科目の登録期限)	—
3月(中旬予定)	小樽商科大学コラボルーム / 最終報告会	赤穂雄磨 小樽商科大学 特任准教授

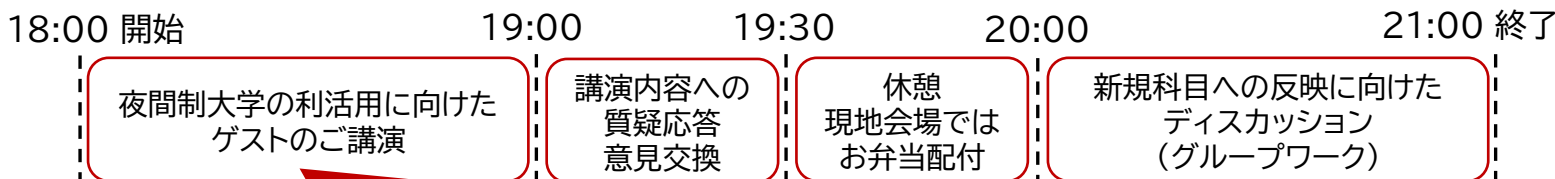


中津夏子さん  
インフィニティ国際学院  
中等部 チューター



中谷知記さん  
北海道ニセコ高校  
観光グローバルコース担当  
教諭

### 各回の進行



講演トピックはホスト自治体の取組に応じて毎回変わるのがポイントです

例: 高校の魅力化・存続への取組、地域企業の人材育成支援、総合的な探究の時間の進化、社会教育活動の改善、地域おこし協力隊の起業促進などなど

【お問い合わせ先】  
小樽商科大学 グローカル戦略推進センター(担当:赤穂)  
☎ 0134-27-5465  
✉ akaho@res.otaru-uc.ac.jp

本チラシのダウン  
ロードリンク、アーカイブリンクはコチラ



ユニバーサル・ユニバーシティ構想についてはコチラ



